

郷きょうにかえってたまましよ書す

賀が 知ち 章しょう

少しょう小しょう家いえもはな離れ老ろう大だいにかえ回る

郷きょう音いん改あらたまる無なきも髻びん資もう毛お衰ちやう

児じ童どう相あい見みてあい相し識しらうず

笑わらてと問きやくうは客い何れ処ところよりきた来るか

【作者】賀知章(六五九～七四四)は盛唐の詩人で、浙江省蕭山県(せつこうしょうしょうざんけん)の人とされています。字は季真、四明狂客と号す。

則天武后時代の科挙試験で合格した進士、玄宗時代に礼部侍郎(官僚の上級職)でした。中国の代表的な詩人である杜甫の漢詩仲間であり「飲中八仙の一人」とされています。お酒をこよなく愛飲し、老後は故郷に戻り八十六歳の老翁でした。酔って馬に乗る姿は揺れる船に乗るかのようで、井戸に落ちててもそのまま眠り続けると歌

【通釈】若いときに故郷を出た私は、年老いてからようやく帰ってきた、国の訛りこそは抜けなかったものの、髪はすっかり変わってしまった。

子どもたちは私が何処の誰かわからないらしい、にこにこ笑いながら「お客さんは何処からきたの?」たずねてきた。

【備考】飲中八仙(いんちゅうはっせん)とは、中唐初めの八人の酒豪(賀知章、汝陽郡王李璣(じょうようおうりしん)(李憲の長子)、李適之(りてきし)、崔宗之(さいそうし)、蘇晋(そしん)、李白、張旭(ちやうきよく)、焦遂(しょうすい))。また彼らを謳った杜甫の詩『飲中八仙歌』の略。